

CACグループの サステナビリティ

グローバル企業として、そして、社会の一員として、
グループ全体で取り組むべき課題と認識し、
SDGsに取り組むことでサステナブルな社会実現への
貢献を目指しています。

SDGsとは？

CACグループのサステナビリティへの取り組みは、2015年9月に国連で採択された、2030年までの持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals) の達成にも寄与しています。SDGsの17のゴールのうちから、本文で紹介した取り組みが該当すると考えられるゴールを掲載しています。

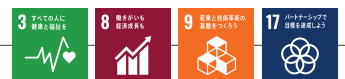
SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



技術・品質

> P29

関連するSDGs



- DX時代の新たなサービス開発・提供

人材

> P31

関連するSDGs

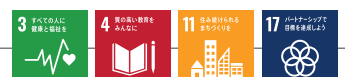


- ワークスタイル変革による働き方の改善
- デジタルシフトへの取り組み

社会

> P33

関連するSDGs



- ボッチャの普及・支援活動
- 教育支援

技術・品質

CACグループは、サステナブルな企業を目指して、
新たな技術の活用や品質向上への取り組みを行っています。

DX時代の新たなサービス開発・提供

DXによる大きな変化に対応するため、
新たなテクノロジーでの価値提供を進めています。



「人を察し、人を活かし、人を健やかにするIT活用、HCTech※」に注力

当社グループでは、デジタルトランスフォーメーション(DX)への対応として、関連する技術を活用した商品やサービスの開発を進めています。ブロックチェーンやIoT、クラウド技術を使ったソリューションのラインナップ充実を図るとともに、“人”に代わりAIが行うことで労働力不足の解消や生産性の向上につながるサービスの開発・提供にも注力しています。

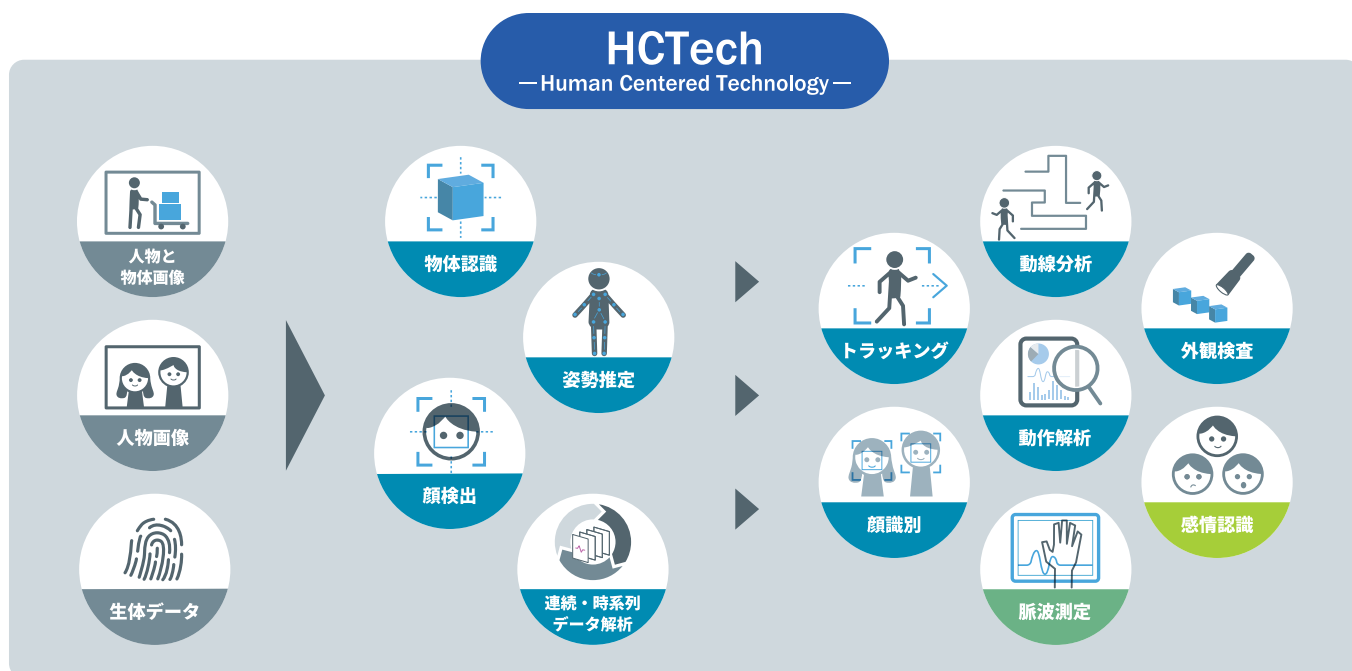
シーエーシーでは、2016年からカメラが捉えた顔の画像を解析して感情を推定する感情認識AI技術を取り入れ、感情分析を行う「心sensor」や、表情のトレーニングアプリ「心sensor for Training」などを開発し、教育やマーケティングなど様々な分野へ提供してきました。

このようなAIを使った画像解析分野での実績や蓄積した

ノウハウを基に、2020年からは「人を察し、人を活かし、人を健やかにするIT活用、HCTech」というコンセプトを打ち出して、注力分野として取り組んでいます。例えば転倒などの人の姿勢・動作の異常検知や、膨大な時間と専門知識を必要とするデータの分析・識別などを人に代わってAIが行うもので、様々な産業や分野に活用できる技術です。また、自社の技術だけでなく、他社の技術やビジネスモデルと融合させることで、新たなソリューションやサービスを開発することも考えています。

日本では少子高齢化が進み、労働力低下などが社会問題となっています。HCTechはさらなる技術の進展でその解消の一助となることを目指すと同時に、当社グループの持続的な成長にも貢献していきます。

※HCTech(Human Centered Technology)



HCTechが扱う主な技術

TOPICS

事例紹介

睡眠中の赤ちゃんの死亡を減らす「みまも。with リズミル」を共同開発

睡眠中に赤ちゃんが死亡する乳幼児突然死症候群（SIDS:Sudden Infant Death Syndrome）という病気があります。日本での発症頻度はおおそ出生6,000～7,000人に1人といわれ、乳児期における死亡原因の第4位となっています。また、睡眠中に赤ちゃんが死亡する原因には、SIDSのほか、窒息などによる事故もあります。

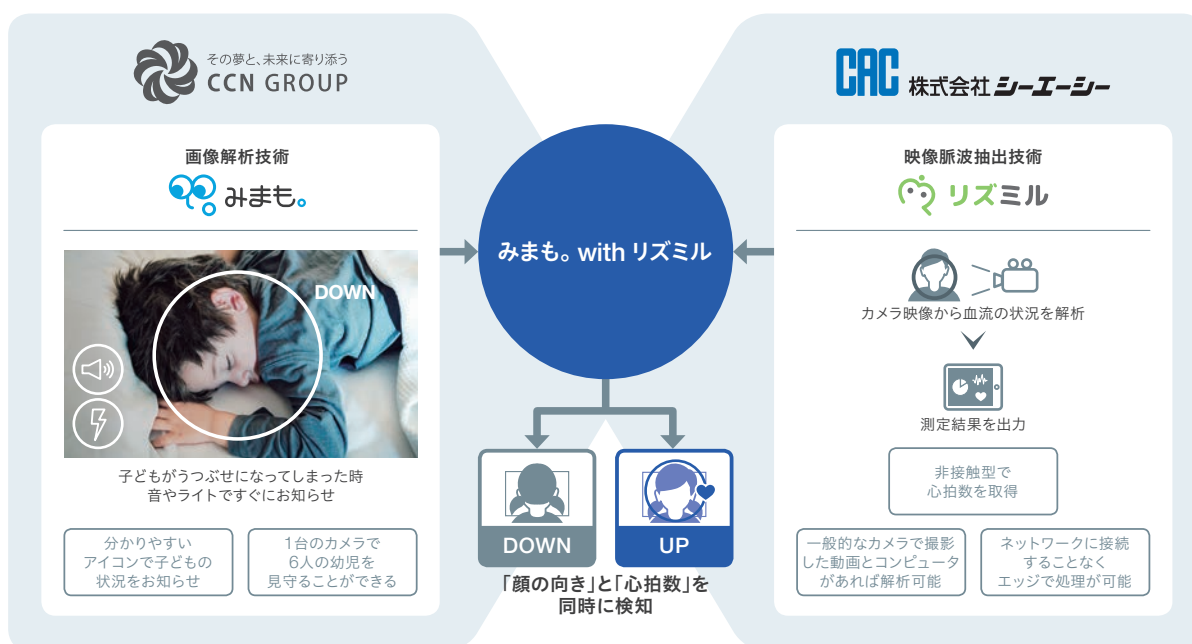
こうした病気や事故から赤ちゃんを守るため、保育の現場では午睡中の赤ちゃんを5～10分に1回の頻度で呼吸チェックや、うつ伏せ寝になっていないかなど、こまめな状態確認が行われています。しかし、人手不足の中、一人で複数の赤ちゃんを担当しながら、同時に様々な業務をこなす必要がある保育士にとっては、身体的にも心理的にもその負担は大変大きなものとなっています。

そこでシーエーシーは、カメラ映像をベースにしたIoT技術

による赤ちゃんの午睡（お昼寝）チェックを支援するサービス「みまも。」を提供している株式会社CCNグループと、シーエーシーのカメラ映像から心拍数を測定する、映像脈波抽出技術を使った非接触型バイタルセンシングソフトウェア「リズミル」を組み合わせた「みまも。with リズミル」を共同開発しました。

「みまも。with リズミル」は、赤ちゃんの睡眠中における死亡リスク要因と考えられる「うつ伏せ寝状態か否かのチェック」と「心拍状態のチェック」を同時に行い、音やライトで速やかに異常を知らせます。

シーエーシーは、保育施設における赤ちゃんの死亡リスク低減とともに、保育に携わる人々のサポートや負担軽減、赤ちゃんを施設に預けている保護者に対する安心を、これからもお届けしてまいります。



人材

CACグループは中期経営戦略の下、デジタルビジネスへのシフトを推進しています。その推進に必要な人材を育成するための仕組みを整えるとともに、社員一人一人がCACグループの目指す方向性を正しく認識し、自発的に行動していける環境づくりに取り組んでいます。

ワークスタイル変革による働き方の改善

当社グループでは、ワークスタイル変革により、様々な働き方の実現とともに、緊急事態下での事業継続も目指しています。



ワークスタイル変革による多様な働き方の実現

CAC Holdings および中核事業会社のシーエーシーは、2011年からワークフローのシステム化やテレビ会議、電話会議などの活用と、これらに伴うペーパーレス化などを進め、2012年に「いつでも、どこでも、誰とでも」仕事ができるテレワーク環境と体制を整備しました。これにより、営業部門、管理部門のフロアを対象にフリーアドレス制を導入したほか、在宅勤務も可能となり、個人の事情やライフスタイルに合わせた多様な勤務形態の確立を実現しています。シーエーシーは2016年に、総務省により「テレワーク先駆者百選」に選出されています。



フリーアドレスのフロア

緊急事態下における事業継続

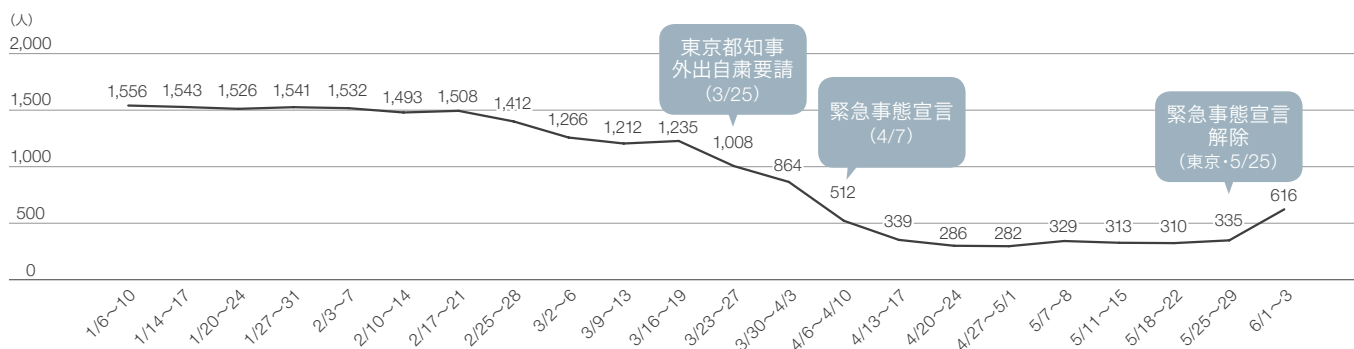
このワークスタイル変革は、生産性向上やコスト削減につながるだけでなく、不測の事態への対処にも大きな役割を担っています。

CAC Holdings およびシーエーシーは、2020年の新型コロナウイルス感染症拡大に伴う外出自粛の要請に際し、リモートワークやWeb会議システムを活用することで、出社人員数を平常時の約2割に近づけながら大きな混乱もなく事業を継続することができました。

これによってお客様へのサービス提供を止めることなく、社員の健康を守ると同時に、感染拡大防止にも大きく貢献したと認識しています。

今後もワークスタイル変革を続けていくことで、企業の成長とともに、当社の財産である社員が、そのスキルを十分に発揮できる環境を整備していきます。

本社ビル(東京都中央区)入退館者数推移



デジタルシフトへの取り組み

当社グループは、中期経営戦略に基づき、デジタルビジネスへのシフトを図るために、社員一人一人のスキルアップを促進し、会社の持続的な発展とともに技術革新に貢献することを目指しています。

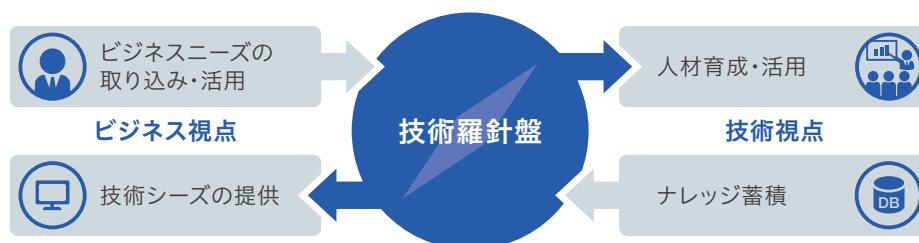


技術羅針盤の策定

中期経営戦略の下、デジタルビジネスへのシフトを図るため、シーエーシーでは2018年に取り組むべき技術領域をリストアップし、その定義や現在の取り組み状況、今後の対応策、事例、ビジネス価値等をプロットした「技術羅針盤」を策定してい

ます。これにより、社員は自分の必要な技術や、方向性、取り組むべき内容などが確認できるようになりました。なお、技術の発展や世の中の流れによって、必要な技術や方向性、対応策が変わってくるため、定期的な改定を行っています。

技術羅針盤のイメージ図



クラスタ活動

技術羅針盤に含めた技術をより効率的に多くの社員が獲得していくために、同じ技術志向を持つ者同士がコミュニティを作り、技術習得に必要な支援を相互に行う「技術クラスタ」活動を2018年から続けています。

各メンバーが集まって行うオフライン活動だけでなく、ツールを利用したオンライン活動を行うことで距離と時間の壁を越え、有益と思われる情報を他者にシェアして相互のスキルアップを図るほか、質問の投稿に対して経験者が回答することで解決への時間短縮ともなっており、今般のコロナ禍においても問題なく活動は継続しています。報告会の実施や、社内ポータルサイトでの発信などを行うことでナレッジの蓄積につなげています。また最近では、社内に留まらず社外向けセミナーを開催するなど活動の場を広げています。



社会

CACグループは、社会とのつながりや信頼を強固にすることが、自らの持続的な発展につながると考え、様々な取り組みを進めています。

ボッチャの普及・支援活動

CACグループは、2016年から障害者スポーツ「ボッチャ」の普及・支援活動を通して、全ての人の健康に貢献することを目指し、様々な取り組みを進めています。また、教育の場としての学生向けボッチャ大会の実施や、住みやすい街づくりなどにつながる、本社内屋内に設置したボッチャコートの一般貸し出しなども行っています。



全ての人の健康につながるボッチャの普及・支援活動

当社グループは、障害者スポーツであるボッチャが全ての人が楽しめるスポーツであることから、様々なアプローチでボッチャの普及・支援活動を行っています。

国内での大会運営のサポートをはじめ、体験会や講習会を開いています。2019年は24件のイベントで延べ約1,600人の方々にボッチャの魅力をお伝えしました。当社所属のボッチャアスリート佐藤駿選手も、グループ社員と共に各所でボッチャの魅力を伝えています。また、当社グループには日本ボッチャ協会公認審判員の資格を取得している社員がいますが、2019年は16の大会で延べ96人が審判員としての重責を担いました。

さらに、2017年からは、より多くの方にボッチャを楽しんでいただくために、用具購入がハードルとなっている団体へボッチャ用具を寄贈しています。2019年は25の非営利団体・法人にボッチャボールセットやボッチャランプを寄贈し、希望する団体には講習会も実施しました。

社内での普及活動も盛んで、新人研修や全社員研修などでボッチャ体験会を取り入れるなど、社員もボッチャをすることで、円滑なコミュニケーションや心身の健康に寄与しています。

これらボッチャの普及・支援活動により、障害のある方のみならず、お子様からお年寄りまで、健常者の方の健康維持・促進へも貢献することを目指しています。

2019年の活動実績

体験会や講習などの普及活動
24イベント／約1,600名

16のボッチャ大会での
グループ社員による審判
延べ96名

ボッチャ用具の寄贈
25団体

健康増進の一助となることを目指し、ボッチャコートを一般開放

2019年7月、本社内屋1階に、主要な国際大会で採用されているスポーツ用床材（タラフレックス）を使用した公式サイズのボッチャコートを設置しました。社内利用のほか、アスリート向けの本格的な練習場所として、また企業における従業員の健康保持増進の、あるいは地域住民の交流や健康保持の一助となる場所となることを目指し、一般向けに貸し出しを行っています。コート出入口における自動ドア設置や障害

者用トイレの整備など、バリアフリーな環境を提供することにより、全ての人に健康な生活を届けるとともに住みやすい街づくりに貢献していきます。



ボッチャコート（本社1階）

障害がある学生の学びの場としてのボッチャ大会の実施

東京都内の特別支援学校に通う生徒を対象とした、CACグループ主催のボッチャ大会「CACカップ～学生ボッチャ交流戦」を、2017年から毎年開催しています(2020年の第4回大会はコロナウイルス感染防止のため中止)。CACカップが、参加する生徒にとって他校との交流やボッチャの技術および競技マナーやルール、スポーツマンシップを習得するとともに、普段の練習の成果を発揮する主要な目標の場となること、また生

涯スポーツへの意識向上の場となることを目標としています。また、観戦者の方にも実際にボッチャを体験していただくイベントなども併催し、ボッチャが障害の有無や老若男女を問わず、全ての人が楽しめる健康的なスポーツであることを体感していただいています。なおCACカップは、CACグループ社員自らが企画、運営を行っており、大会運営者やボランティア参加者にとっても健康と福祉を体感する貴重な場となっています。



CACカップの様子(2019年9月開催)

教育支援

CACグループは、知見を有する財団や教育機関と共に、次世代を担う若者への良質な教育の提供に取り組んでいます。

2019年10月からCACグループの一員となった、インドネシアに主要拠点を持つMitrais社は、2002年に起こったバリ島爆弾テロ事件後の復興支援として設立された財団Yayasan Kemanusiaan Ibu Pertiwiの主要スポンサーです。「教育を通じて貧困の連鎖を断ち切る」ことを目的とするこの財団を通じて、500人以上の子どもたちの教育を支援しています。

また、シーエーシーは、高等専門(高専)学校生が日頃の学習成果を生かして情報通信技術のアイデアと実現力を競う高専プログラミングコンテストに2014年から協賛し、その大会の発展やIT人材の育成に寄与しています。さらに、高専生、大学生を対象にインターンシップを実施するなど、未来を担う若者の成長を見据えた学びの場を積極的に提供しています。



Mitrais社の支援パーティーの様子

